

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00957

研究課題名(和文) 請来典籍の集積・活用からみた古代王権の「知」の統合策に関する総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive research on the integration policy of "knowledge" of ancient kingship from the accumulation and utilization of imported texts

研究代表者

中林 隆之(Nakabayashi, Takayuki)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：30382021

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中国を中核とした東アジア諸国で編纂された経典・漢籍の日本へ来の様相を網羅的に把握する作業を進め、請来された諸典籍に関するデータベースの作成と公開を目指した。また典籍を請来した6～10世紀の学侶を網羅的に把握した。とくに道昭の事績の検討と、来日した唐僧鑑真と弟子等について、彼らの請来した律系の典籍類が日本における律宗に及ぼした影響について考え、関連論文を公表した。また天台宗延暦寺について、その一山寺院の形成の実態を把握した。他方、典籍の地方普及を考えるため地方での寺院造営を概括的に把握した論文を公表するとともに、特徴的な事例として武蔵国橘樹評に建立された影向寺に関する論文を公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本古代に請来された諸経典・典籍の内容を検討し、それらの活用のあり方を問うことは、日本列島が受容した思想・学術の大枠の様相や、それを請来した僧・俗人の特徴、および受容の結果、日本古代の思想・学術の形成、とりわけ南都六宗や平安諸宗などの成立に及ぼした影響を個々の仏典・漢籍レベルで明らかにすることに繋がる。これを通して古代国家の推進した思想・学術編成策の特徴を東アジア地域世界の中に位置づけて具体的に解明することが可能となり、ひいては古代から中世にいたる国家的な思想編成策の推移や社会的宗教勢力の特徴とその推移を解明する手がかりを得ることが出来る。

研究成果の概要(英文)：In this study, we have worked to comprehensively understand the aspects of the arrival of sutras and Chinese classics compiled in China and other East Asian countries to Japan, with the aim of creating and releasing a database of the various imported classics. In addition, a comprehensive understanding of the scholars from the 6th to 10th centuries who imported these scriptures to Japan was obtained. In particular, we considered the influence of Dosho and the Tang priest Ganjin, who came to Japan, on the Ritsu sect in Japan. We also examined the various temples of Enryaku-ji of the Tendai sect and their formation as a group of monasteries. On the other hand, as a prerequisite for considering the issue of local transmission of sutras, he reviewed temple architecture in various parts of Japan and studied the character of Yogou-ji Temple, built at Tachibana-hyo in Musashi Province, as an example of such a temple.

研究分野：日本古代国家史・仏教史

キーワード：日本古代国家 東アジア地域世界 請来仏典 南都六宗 平安諸宗 学侶 漢籍

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

日本古代の宗教・知識・思想体系の国家による教学的編成と、それらの宗教・知識・思想の列島社会での普及のあり方を詳細に明らかにするためには、その「知」の源泉を、具体的に把握する必要があり、そのためには日本列島に請来された仏典を中心とした漢文典籍類の網羅的把握が求められる。そこで平成26～28年度採択の基盤研究(C)の成果と課題を継承して、6世紀から10世紀にいたる漢文典籍の網羅的蒐集作業を引き続き行う。それにより東アジア諸国からの典籍請来の変遷を跡付け、日本列島内での受容・伝播・活用の様相とその影響を、時期・社会基盤・階層・地域的偏差を考慮して把握する。あわせて、受容した典籍類(とくに仏典)の中国(唐・宋)・朝鮮半島(新羅・高麗)への環流の諸相も見通す。それらの作業を通じて、日本古代王権による、典籍を活用した宗教・思想・知識の編成策がその後の列島内および東アジア諸地域の思想構造の形成に果たした役割について、中世への推移を見据えて実態的に把握するための道筋をつける。

2. 研究の目的

本研究では、平成26～28年度採択の基盤研究(C)の成果と課題を発展的に継承し、請来典籍の網羅的確認作業を精緻に行なうことにより、東アジア諸国からの典籍請来の変遷を跡付け、日本列島内での受容・伝播・活用の様相とその影響を、時期・社会基盤・階層・地域的偏差を考慮して把握する。とりわけ7世紀から10世紀にいたる東アジア諸地域からの請来仏典と、その仏典類を請来した学侶らの動向、および彼らを主軸として形成された中央学僧集団たる学侶組織たる「宗」の編成のあり方の推移とその傾向、また請来典籍を蓄積した拠点寺院の動向を詳細に明らかにする。また受容した典籍類(とくに仏典)の中国(唐・宋)・朝鮮半島(新羅・高麗)への環流の諸相も見定めることをめざす。それらの作業を通じて、日本古代王権による、典籍を活用した宗教・思想・知識の編成策がその後の列島内および東アジア諸地域の思想と「知」の構造の形成・展開に果たした役割について、中世への推移を見据えて動的に把握するための道筋をつける。

3. 研究の方法

日本古代に請来された仏典を中心とした漢文書籍を網羅的に把握する。またそれを踏まえて日本古代の「宗」編成とその推移のありかたを東アジア的視点から解明する。そのため前回の基盤研究(C)の成果と課題を継承し、古代に請来された仏典を中心とする典籍類の蒐集とデータベース化を行う。また諸典籍を請来した倭国・日本および朝鮮半島諸国と唐の僧侶等についても、6世紀から10世紀までの推移について関連史料を網羅的に検討して把握する。あわせて請来された典籍を集積していった中央・地方の諸寺院について、律宗や天台宗といった中央諸宗との関係に注目しながらその特徴を解明していく。

4. 研究成果

(1)平成30年度

日本古代の国家的な宗教・思想・知識の編成策を具体的に明らかにするために、前回の科研以来の課題である、日本列島に請来された仏典を中心とした漢文典籍や、逆に日本から東アジア諸国に環流された諸典籍に関するデータベースの構築作業を継続して行った。とくに正倉院文書中にみえる東大寺写経所が管理した諸典籍に関わる帳簿群、とりわけ律宗関連の諸帳簿の整理と禅院経に関わる典籍の整理を行った。

東アジア諸地域からの經典請来とそれを前提とした「宗」の形成の問題を考える一環として鑑真渡来以後の律宗および戒律制度の整備について検討し、その成果を学会で口頭報告した。

前科研以来の研究成果を踏まえて、6世紀から10世紀にいたる古代王権・国家の仏教との関わりとその推移を把握し、その成果を学術書(共著)の中で分担執筆し公表した。

また佐渡国分寺の成立とその特質について示した報告(招待講演)を行った。

(2)令和元年度

前年度の口頭報告を踏まえ、鑑真来日以後の律宗と戒律学修システムの整備過程、および9世紀末以降のそれらの変容と、律宗の地位低下の理由などを考察した結果を、学術論文として公表した。

日本古代の仏教の導入とそれにともなう仏典・漢籍の請来の概略を提示した招待講演を行った。あわせて、その成果の一部を概説書(共著)にて公表した。

なお、当初予定していた中国杭州方面での調査巡検および国際講演会への参加は、台風の影響で断念することとなった。

(3)令和2年度

新型コロナウイルス感染症の流行に対応するための学内外での教育活動の整備作業に忙殺され、計画していた本来の研究活動、とりわけ中国と日本での経典類の往還をあとづける一環として予定していた天台宗などへの調査巡検も見送らざるを得なかった。

ただし、そうした中で、武蔵国橘樹郡（評）に建立された古代影向寺の性格とその歴史的背景に関わる学術論文を公表することができた。

また仏教の導入時からの古代国家による仏教の興隆と活用のあり方を概説的に論じた論文を共著にて発表した。

(4)令和3年度

引き続き新型コロナウイルス感染症の流行の中で、本年度も中国や朝鮮半島での典籍の往還に関わった寺院などへの調査巡検は実施できなかった。

鳥根県埋蔵文化財センターが主催した研究会に招待され、古代佐渡国分寺の新造薬師像と新訳薬師経典との関連性を指摘したオンライン報告を行った。

(5)令和4年度

2022年末に脳梗塞により入院したが、その発症以前には、請来典籍を多く保持していた大官大寺（大安寺）の実態をさぐるため、奈良国立博物館で開催された「大安寺展」の現地見学と、大安寺遺構の現地調査を実施した。また京都国立博物館で開催された企画展を見学し、河内長野の観心寺および金剛寺の、密教を中心とした請来典籍の保持状況とその活用の歴史に関する知見を深めることができた。

多くの典籍を請来した学問僧道昭と唐僧鑑真の事績を概括した小論文を共著の概説書2冊に収録した。

(6)令和5年度

最終年度である本年度には、前回の科研から継続して請来の寺院やその他の官衙などでの分布と保管および活用に関する大枠的推移と、東アジア諸国への請来典籍の環流・活用の諸相を確認するためのデータベースの作成・修正作業を行い、その公開へむけた準備作業を行った。ただし自身の疾病（脳梗塞）の後遺症の影響などもあり、残念ながらこの作業は必ずしも順調に進めることができず、データベースの完成・公開は今後の課題とせざるを得なかった。また新型コロナウイルス感染症流行の影響もあり、当初予定していた、日本に請来された典籍の原本を所持していた中国・韓国などの諸寺院の現地巡検調査も結局実施できず、これまた今後の課題として残された。

古代国家の海外交流の実態に関する共著のなかで、仏教の倭国への伝来と仏典の請来、飛鳥寺の建立などに関する論文を分担執筆した。

また日本天台宗の本山であり、平安期以降の日本における仏典の最大の集積地ともいえる比叡山延暦寺について、その一山寺院としての形成について、最澄・円仁・円珍といった請来典籍をもたらした入唐僧と諸院家の成立との関わりを軸に明らかにした論文「比叡山諸院と初期天台宗の形成」を執筆した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中林隆之	4. 巻 51号
2. 論文標題 古代橘樹郡・影向寺遺跡とその史的前提 - 屯倉・県と名代 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 専修大学人文科学年報	6. 最初と最後の頁 45, 71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中林隆之	4. 巻 862号
2. 論文標題 日本古代の授戒儀礼と律宗	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 1, 17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中禎昭	4. 巻 50
2. 論文標題 橘花ミヤケにおける氏族の動向 物部・刑部・飛鳥部吉志	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 専修大学人文科学研究所『人文科学年報』	6. 最初と最後の頁 47, 92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 4件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中林隆之
2. 発表標題 古代佐渡をめぐる諸問題 - 隠岐との比較をもとに -
3. 学会等名 島根県埋蔵文化財センターテーマ研究会「古代隠岐の形成と特質 - 」第4回検討会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中禎昭
2. 発表標題 編戸システムの検討 戸主の地位継承を中心に
3. 学会等名 新古代史の会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中禎昭
2. 発表標題 日本古代における気候変動と国家 八世紀初頭の災害対策
3. 学会等名 専修大学緑鳳学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中林隆之
2. 発表標題 古代における仏教導入とその意義
3. 学会等名 古代史セミナー 古代史の最前線 - 神奈川の研究者は考える (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中林隆之
2. 発表標題 コシ・出雲の日本海交流と畿内 - ヌナガワヒメ伝承の位置づけをてがかりに
3. 学会等名 新古代史の会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中林隆之
2. 発表標題 日本古代の受戒制度と律宗
3. 学会等名 新潟史学会（例会）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中林隆之
2. 発表標題 東アジアの中での古代佐渡 - 佐渡国分寺の建立・その後を素材に -
3. 学会等名 専修大学人文科学研究所研究例会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 中林隆之, 仁藤敦史, 森公章, 佐藤信, 他全15名の共著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 282
3. 書名 古代史講義【海外交流篇】	

1. 著者名 中林隆之, 宮崎健司, 細井浩司, 岡野浩二, 駒井匠, 佐藤文子, 他全23名	4. 発行年 2024年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 -
3. 書名 日本古代の社会と宗教	

1. 著者名 中林隆之, 田中禎昭, 仁藤敦史, 三舟隆之他, 他37名の共著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 288
3. 書名 人物で学ぶ日本古代史2 奈良時代編	

1. 著者名 中林隆之, 鷺森浩幸, 古市晃, 仁藤敦史, 他19名の共著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 277
3. 書名 人物で学ぶ日本古代史1 古墳・飛鳥時代編	

1. 著者名 田中禎昭 他、27名の共著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 八木書店	5. 総ページ数 568
3. 書名 馬と古代社会	

1. 著者名 中林隆之・田中禎昭、他25名の共著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 270
3. 書名 テーマで学ぶ日本古代史 社会・史料編	

1. 著者名 佐々木虔一・武廣亮平・森田喜久男編、田中禎昭他、27名の共著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 八木書店	5. 総ページ数 402
3. 書名 日本古代の輸送と道路	

1. 著者名 仁藤敦史編，分担執筆者 中林隆之他21名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 竹林舎	5. 総ページ数 557
3. 書名 古代文学と隣接諸学3 古代王権の史実と虚構	

〔産業財産権〕

〔その他〕

専修大学人文科学研究所 人文科学年報 https://www.senshu-u.ac.jp/research/center/jinbun/activities/publications/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	田中 禎昭 (Tanaka Yoshiaki) (60751659)	専修大学・文学部・教授 (32634)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------